

## 巻頭言

関わり合いの術<sup>すべ</sup>

立教大学チャプレン 中川 英樹

わたしが暮らす学院校宅の庭には、数匹のヒキガエルが生息しています。好んでは決して触りたくないその容姿。雨上がりに限らず、夜、庭に出ると必ずといってよいほど対面してしまいます。池袋で庭のある家に暮らせること自体贅沢なことなのですが、カエルだけは昔からどうも好きになれません。ときどき、暗がりやで、蹴飛ばしてしまっ、一人で「ギャッ」と叫んでいます。でも叫びたいのは、本当はカエルの方かもしれません。カエルの寿命は10年ぐらいなのだそうです。冬には冬眠して次の春を待ちます。我が庭のカエルたちは今年で何歳になるのか、そんなことに想い耽ったりする、この梅雨です。

さて、わたしにとっては苦手なカエルですが、日本の言葉遊びの中では、ユニークで縁起のいい言葉をたくさん提供してくれる存在として愛されています。「福がカエル」、「お金がカエル」、「無事にカエル」、「災いを福にカエル」など、「カエル」は返る、帰る、変える、還る、と読み換えられて、カエルの置物が玄関先に置かれたり、小さなカエルの形をしたお守りが財布の中に入れられたり、また昭和末期には、「カエル・コール」とかで、



帰るときには家族に連絡を入れよう、という某通信会社のキャンペーンが張られたりもしました。

誰かの帰りを待つこと、誰かの無事を祈ること……。そして、いつも誰かに待ってもらっていること。こうした、待たれ・待つという「つながり」、祈り・祈られるという「つながり」、それらは、「つながり」が希薄になったと云われる、この現代社会に生きるわたしたちが再び取り戻さなければならない、「関わり合いの術」のように思います。「いってらっしゃい」と「おかえり」、「ただいま」という関わり合いの術……。 「ありがとう」と「ごめんなさい」、「おはよう」と「おやすみなさい」、わたしが小さい頃は、街中で、そんな関わり合いの術としての挨拶が交わし合われていました。そうやって、互いがつながり合って、互いを守り合っていたように思い返されます。

「関わり合いの術」ということで思い出すエピソードがあります。今から20年程前、神学校を卒業して、月島の教会に赴任して直ぐの頃、近所の文房具屋さんに消しゴムを買いに行った時のことです。わたしが店頭で並んでいる消しゴムを手にとって、黙ってレジに向かうと、店主が「うちはモノだけ売ってるんじゃないんだ」って怒り出しました。どうやら、わたしが「こんにちは」との挨拶もなしに店に入ったこと、「消しゴムはどこですか」ってたずねなかったこと、そして、「これください」って言わなかったことに腹が立ったらしいのです。「うちはモノだけ売ってるんじゃないんだ」、正直面倒くさいと思

いました。でも、そこには不思議と温かく懐かしい雰囲気があって、決して一方通行にモノを売らず、必ず声を掛けることを大切にしてきた店主の想いが詰まっていたように思えます。無言でモノが売り買いできる時代……人と人、人とももの関係がまったく人手を通さず、キーボードのエンターキーひとつで行われる時代。どうして、こうも人は関わりを避けたがるのか、そんなことを自戒も込めて強く思わされます。

その一方で、人は関わりを求めます。孤立を怖れます。しかし、関わり合うことは避けたがる……この間をつなぎ直してくれるのが、やはり「挨拶」だと思うのです。「挨拶」という漢字は「押す・開く」という意味を、一方の「拶」は「近づく・進む」という意味を持つと云われます。そこから、挨拶とは「心を押し開く」、「心を開いて近づく」という意味の言葉へと発展していったのだそうです。挨拶とは「心を押し開く」……まさにそう思います。「ありがとう」のたった5文字に人は救われることがある……何の変哲もない「おはよう」の言葉に一日頑張れたり、「おかえり」との挨拶に存在を肯定されることがある……。どれも心が押し開かれる体験にほかなりません。


「マタイによる福音書」では、復活したイエスが一番最初に発した言葉が「おはよう」という挨拶の言葉でした。この「おはよう」は直訳では「喜べ」です。喜べないたくさんの現実を抱えながら、迷い疲れ、傷ついたたくさんの人びとに、神は「喜べ（おはよう）」と今日も語り掛けます。そうやって、神は、関わりを恐れる人びとの心を押し開こうとします。

「恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。」これは、天使ガブリエルがマリアに御子の身ごもりを伝えたときの挨拶

の言葉。「安心していきなさい。」これは、イエスが、12年の間、病に苦しんだ女性に向けて、別れ際に語った挨拶の言葉。「思い悩むな」、「立ち上がっていきなさい。」これらもみな、イエスが、その人の必要として語られた、挨拶の言葉たちです。イエスもまた、「関わり合いの術」に長けた人でした。イエスの言葉は、いつもなら、うっとうしく感じるこの時節の雨が、ときに、慈雨と想えたりもするように、疲弊する中にも感謝すべきことがあることを教えるものでした。

この傷ついた社会を涉っていく中で、わたしたちもまた誰かを想い、誰かのために「関わり合いの術」を手放すことなく、「いってらっしゃい」と「おかえり」、「ただいま」の合間を生きる者で在りたいと願います。

ほっこりしませんか?



## なかチャブCafe

大学生活での心配ごと、人生や将来についての不安、仲間や家族との悩みなど、その解決のヒントを、案外、聖書の中に見つけることができたりします。

「なかチャブCafe」では、立教大学チャブレンの中川英樹が、キリスト教の牧師として、皆さんからのどんな話でも聴き、受け止め、一緒に悩んだり、困ったり、立ち止まったりしながら、聖書の世界を巡り行き、ようやくと答えをたぐり寄せる、そんなお手伝いをするところです。

誰かと話したいなあ……なんか疲れちゃったから、ほっこりしたいなあ……と思ったときは、ぜひ一度訪ねてみてください。

◆池袋キャンパス開店日： 毎週 水・金曜日 10:30-20:00  
 ※「昼の祈り」、「金曜・夕の祈り」の時間帯は除く  
 水曜日10:45-12:00、金曜日18:45-20:00は、  
 一緒に聖書を読む時間となります  
 池袋チャペル会館 1F チャブレン室No.4

◆新座キャンパス開店日： 毎週 火曜日 10:00-17:00  
 ※「昼の祈り」の時間帯は除く  
 11:00-12:15は一緒に聖書を読む時間となります  
 新座チャペル会館 第1チャブレン室

申込不要、どなたでも参加できます。  
 当日、直接チャブレン室にお越しください。